

令和七年度 お茶の水女子大学 文教育学部 学校推薦型選抜

帰国生徒・外国学校出身者特別選抜 試験問題

言語文化学科(仏語圏言語文化プログラム)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

僕は小さいときからずっと、日本生まれの日本人として日本語を使って生きてきたので、僕というシステムの中には日本語のいろんな言葉やいろんな表現が、コンテンツとしてぎっしり詰まっています。だから自分の中にある感情なり情景なりを文章化しようとするとき、そういうコンテンツが忙しく行き来をして、システムの中でクラッシュを起こしてしまうことがあります。ところが外国語で文章を書こうとすると、言葉や表現が限られるぶん、そういうことがありません。そして僕がそのときに発見したのは、たとえば言葉や表現の数が限られていても、それを効果的に組み合わせることができれば、そのコンビネーションの持つて行き方によって、感情表現・意思表示はけっこううまくできるものなのだということでした。要するに「何もむずかしい言葉を並べなくてもいいんだ」「人を感じさせるような美しい表現をしなくてもいいんだ」ということです。

ずっとあとになってからですが、アゴタ・クリストフという作家が、同じような効果を持つ文体を用いて、いくつかの優れた小説を書いていることを、僕は発見しました。彼女はハンガリー人ですが、一九五六年のハンガリー動乱のときにスイスに亡命し、そこで半ばやむなくフランス語で小説を書き始めました。ハンガリー語で小説を書いているとは、とても生活ができなかったからです。フランス語は彼女にとっては後天的に学んだ(学ばざるを得なかった)外国語です。しかし彼女は外国語を創作に用いることによって、彼女自身の新しい文体を生み出すことに成功しました。短い文章を組み合わせるリズムの良さ、まわりくどくない率直な言葉づかい、思い入れのない的確な描写。それでいて、何かとても大事なことが書かれることなく、あえて奥に隠されているような謎めいた雰囲気。僕はあとになって彼女の小説を初めて読んだとき、そこに何かしら懐かしいものを感じたこと

を、よく覚えています。もちろん作品の傾向はずいぶん違いますが。

とにかくそういう外国語で書く効果の面白さを「発見」し、自分なりに文章を書くリズムを身につけると、僕は英文タイプライターをまた押し入れに戻し、もう一度原稿用紙と万年筆を引っ張り出しました。そして机に向かって、英語で書き上げた一章ぶんくらいの文章を、日本語に「翻訳」していきました。翻訳といっても、がちがちの直訳ではなく、どちらかといえば自由な「移植」に近いものです。するとそこには必然的に、新しい日本語の文体が浮かび上がってきます。それは僕自身の独自の文体でもあります。僕が自分の手で見つけた文体です。そのときに「なるほどね、こういう風に日本語を書けばいいんだ」と思いました。まさに目から鱗うろこが落ちる、というところです。

(村上春樹『職業としての小説家』による)

「問い」右の文章で述べられている事例を踏まえた上で、外国語で文章を書くことについて自分の考えを八百字以内で述べなさい。